





国語問題

はじめに、これを読むこと。

(注意事項)

1. この問題用紙は二五ページまである。
2. 解答用紙に印刷されている受験番号が正しいかどうか、受験票と照合し確認すること。
3. 解答用紙の所定の欄に氏名を記入すること。
4. 解答は、すべて解答用紙の所定の欄にマークするか、または所定の欄に楷書で記述すること。(解答用紙は表裏両面にある)
5. 解答は、必ずHBの黒鉛筆を使用すること。
6. 訂正は、消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。
7. 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。また所定以外のところには、絶対に記入しないこと。
8. 問題に指定された数より多くマークしないこと。
9. 解答用紙は、持ち帰らないこと。
10. この問題用紙は、必ず持ち帰ること。
11. この試験時間は、六〇分である。

(マークの記入例)

| 良い例   | 悪い例   |
|---|---|
|  |    |

次の文章は大岡昇平の小説『萌野』を踏まえたものである。これを読み、後の問に答えなさい。

『萌野』という二つの漢字のつらなりが想起させるイメージは、まことに美しい。だがそれを何と読めばいいのか。モヤと読むのだという。だが、日本語の慣習は、「萌野」をモヤと読むことを許さない。「野」をやと発音することには何ら抵抗はあるまいが、「もえる」意の「萌」をモと発音させることは不可能である。だから、萌えるような野というイメージの美しさにもかかわらず、「萌野」という文字をモヤと読めというのは、例の日本語の乱れいがいの何ものでもない。そうした苛立ちを表明するのは、この書物を手にする読者である以前に、作家の大岡氏自身である。ニューヨークに暮す大岡氏の長男夫妻が、新たに誕生しようとする二人の子供のために、名前として「萌野」を用意し、しかもそれをモヤと読ませるのだと知ったとき、作者とほぼ同身大の「私」は、「字面としては悪くなく、『大岡萌野』は一つの風景画を構成している」とは思うが、「しかし『萌野』を『もや』とは『湯桶』読みとしても無理である」と断言する。そして、こう続けているのだ。

戦後の言語改革の結果、漢字を国語一音の表示と見なす傾向が生まれているのを私は知っている。「萌」を「もえる」「もえる」の「も」と考える世代に息子夫婦はいるのである。「有見」と書いて「ゆみ」と読ませた例を知っている。しかし親父は古風な改革反対論者なのである。

初孫の誕生を待ちつつ数日間滞在したニューヨークの街で、肉親や他人と交わり、絵画や芝居に視線を向け、極東の一地域で進行中の戦争への関心を深夜版の新聞紙面にさぐり、微笑し、疲労し、苛立ち、また安堵しもある「私」の内的体験を綴ったこの作品の美しさについては、別の機会に触れてあるのでここでは繰り返さない。ただ、「現代の漢字の読み方の痴呆的変化」

の一典型が、初孫の名前として用意されている事実をどうしてもうけいれがたく、酒のいきおいもあって、「萌野なんて低能な名前のついた子は、おれの孫じゃあない」とまで言つてのけた「私」である大岡氏自身<sup>①</sup>が、紀行文の形式を借りたこの小説の題に、その「萌野」の二語を選んで「もや」とルビまでふつている事実の感動的なさまは、改めて強調しておきたい。では、それはどんなふうに関動的なのか。孫の誕生という事実の前に、息子への心理的こだわりを捨てた父親の姿が素直に語られているからか。それが感動的でないこともあるまい。だがドイツ留学から帰った少壮医師の X せることを許した日本文学が、ほぼ半世紀後に、レイテ島から『野火』を持ち帰った三十歳すぎの大岡昇平によって新たな生きはじめた事実を想起してみるなら、精神において X に似た漢字との戯れを演ずる大岡氏の令息が、まさにイメージにあつては父君の「野の火」に通じる「萌野」を無意識のうちに選んでいる事実は、それ以上に感動的である。『野火』の作者の孫が、「萌える野」を意味するイメージを名前として持つこと。しかもそれが、『野火』によって象徴される「戦後日本」の言語状況を如実に反映していること。つまり、「漢字の読み方の痴呆的变化」こそが、息子による父親への最大の、そして決して意図的ではなからうオマージュを可能にしている点<sup>②</sup>が、この上なく感動的なのである。そして、こうした思いもかけぬ感動が可能である点に、真の日本語の問題<sup>②</sup>が隠されているのだ。しかも、ほんらいであれば犯してはならない慣習上の過ちと思われるいたものが、どれほど伝統的な日本語を内側から支え、豊かな表現力とイメージを保証していたかという事実に、いま一度思いを致してみる必要がある。

たとえば時枝誠記の『国語学原論』に引かれている名高い「ウツセミ」の例を想起してみよう。時枝博士は、その「文字論」を構成する「文字の記載法と語の変遷」の項目に、次のように書かれた。

「ウツセミ」は現身の意であるが、これを「空蟬」と

I

的に記載した結果、理解に際してはそれが

II

的のも

のと考へられ、従つて「空蟬の世」は、人生の義より転じて、蟬の脱殻の如き無常空虚の世の義となり、更に「空蟬の殻」のごとき語が生まれるやうになつた。

日本語を語ろうとするものの必読文献にみられる文章だから、何もいまさら説明めいたものは必要あるまいと思われるが、

ここに無知と誤解から生じた日本語の豊かな増殖ぶりの跡を認めうる点に誰も異存はあるまい。現身(うつしみ)なる語の意味と音声との

### III

法との多様な戯れが、一方で日本神話の構造的理解に通じ、また他方で、西欧形而上学の今日的崩壊過

程へと向けるわれわれの視線を鍛えうる役割をも担っているというきわめて啓発的な論文が、坂部恵氏の『仮面の解釈学』におさめられているから、興味のある方はそれを参照されたい。ここではただ、『万葉集』の「うつせみ」が「空蟬」「虚蟬」の現身と誤つて

### IV

的に解釈され、奈良時代にはこの語に含まれてはいなかった「はかなさ」の意味が、平安朝以後の日本語に定

着したという『岩波古語辞典』の説明を繰返し、誤解が発揮しうる言語的活力と、文化的創造性の一面を指摘するにとどめておこう。そして、「萌野」にも、それに似た力が秘められていると思うのだ。

ところで、今日ときならぬブームを呼んだといわれる日本語論なるものの実態に触れてみた場合、その多くが、概していか  
がわしく、刺激に欠け、貧しい饒舌の反復にしかなくなっていないのは、その著者たちが、正しい日本語、美しい日本語というあ  
りもしない抽象と戯れ、あえて日本語とも呼ぶ必要もあるまい日々の言語体験をいささかも生きてはいない点に由来すると思  
われる。言葉が乱れ、規則から逸脱し、セイトウ性を失つてゆくとき、そこに何が起るか、そしてそのとき起りつつあるもの  
から、その現在を生きつつある者自身が何を吸収してみずからの言語体験をいかに鍛えてゆくことができるかという視点が、  
現代の日本語論の著者たちには完全に欠落しているのだ。そして『萌野』の大岡昇平氏には、その視点が、瑞々しいまでに感じ  
とれるのである。

かりにそんなものがあつての話だが、現在のわが国には、正しく美しい日本語を、書き読み、話す機会を病理学的に、文化的に、政治的に奪われた人びとが少なからずいる。正しく美しい日本語を標榜する者たちは、彼らが口にしたり口にできなかつたりする日本語を、他人に迷惑になり法律にも違反しているストは認められないというのと全く同じ論法で排斥していることになるのだ。いまに見ているがいい。この種の論者たちは、違法ストを攻撃したその舌の根も乾かないうちに、憲法改正などと口にするに決まっている。もちろん、現行の憲法が正しいとか、ここ数年来の国鉄ストが正しいとか、そんなことが問題なのではない。重要な点は、Y という事実だ。言葉は生きている、などと言えば粗雑な比喩の援用とそしられようが、少なくとも、言葉が真に言葉として機能している瞬間は、正しさとか美しさは言語的な場に浮上してはこない。また、一つの漢字の読み方にすべて通暁することが、正しく美しい日本語へと至る道ではない。<sup>④</sup>日本語がしゃべれない、一つの日本語の単語の意味をまだ知らないという理由で奪われた言葉もまた、貴重な言語的な場を構成する。欠語、沈黙、錯誤を、ただ耳に聞えなかった、正しくは響かなかつたといつて言語的な場から無意識に放逐する人びとにとつての美しい日本語がおさまらう。丸谷才一氏なら、すべからく日本語を役人の手から奪回して、文学者の手に委ねよ、とでもいうのだろう。だがそれにしても、何という退屈な美しさであることか。人は、言語学など信じてはならぬように、文学など信じてはならない。言葉は、役人はいうに及ばず、言語学者や文学者の視線がとうてい捉えることの不可能なZを日々生きつつあるのだ。

(蓮實重彦『反∥日本語論』による)

(注) スト……労働者が雇用主に対して労働上の権利を主張するため業務を行わないこと。

問一 傍線 b のカタカナを漢字に改めなさい。

問二 空欄 X に入る人物の姓名を漢字で記しなさい。

問三 傍線①「大岡氏自身が、紀行文の形式を借りたこの小説の題に、その「萌野」の二語を選んで「もや」とルビまでふついている事実の感動的なさま」とあるが、どうして「感動的」といえるのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選びなさい。

1 孫の名が本来の日本語の規則に反した読み方であることを快く思っていない大岡氏が、新しい生命の誕生という厳粛な事実の前に自説を曲げているから。

2 大岡氏が戦後日本の漢字の読み方における変化を嘆くにも関わらず、その変化に従ってつけられた孫の名のイメージの豊かさで美しさを認めているから。

3 孫の誕生にあたって、大岡氏の息子が無意識的に氏の戦後作品を代表する小説『野火』のタイトルを彷彿させる名前を与えたから。

4 大岡氏の孫の名前が、日本語の現在の姿を象徴しているばかりでなく、戦後日本の文学の歴史と現状までも反映しているから。

5 個人的な出来事である孫の誕生に接しても感傷的にならず、大岡氏が文学者として日本語と日本文学の将来に想いを馳せているから。

問四 空欄Ⅰ～Ⅳに入る語の適切な組み合わせを次の中から一つ選びなさい。

|   |      |       |        |       |
|---|------|-------|--------|-------|
| 1 | I 表意 | II 表記 | III 表音 | IV 表意 |
| 2 | I 表意 | II 表音 | III 表記 | IV 表音 |
| 3 | I 表音 | II 表記 | III 表意 | IV 表音 |
| 4 | I 表音 | II 表意 | III 表記 | IV 表意 |
| 5 | I 表記 | II 表意 | III 表音 | IV 表意 |

問五 傍線②「真の日本語の問題」とあるが、それは何を指しているのか。本文中から句読点を除いて二〇字で抜き出しなさい。

問六 傍線③「その著者たちが、正しい、日本語、美しい日本語というありもしない抽象と戯れ、あえて日本語とも呼ぶ必要もあるまい日々の言語体験をいささかも生きてはいない」とあるが、これはどういうことか。その説明としてもっとも適切なものを次の中から選びなさい。

- 1 日本の伝統という狭い枠組みに捕われて、世界の様々な言語との接触によって日本語をより豊かにすることに抵抗している、ということ
- 2 正しく美しい日本語の幻影にいつまでもしがみついて、民主主義の時代に合った日本語の新しい発展を考えようではない、ということ
- 3 抽象的で難解な文語を日本語の本来の姿と考え、実際に日常生活の中で最も多く使われる口語を軽んじてしまっている、ということ
- 4 他人の日本語の使い方間違いを指摘することにのみ没頭し、みずからが普段使っている日本語の問題点には意識が及ばない、ということ
- 5 日本語を永遠に変わることのない理想的な規範としてとらえ、それが実際に使用される中で絶えず変わりゆくものだという視点をもっていない、ということ



問七 空欄Yに入る適切な句を次の中から選びなさい。

- 1 言葉が規則でも規範でもない
- 2 日本語の使用が乱れつつある
- 3 言葉はほんらい不完全である
- 4 言葉が役人に委ねられている
- 5 美しい日本語は滅んでいない

問八 傍線④「日本語がしゃべれない、一つの日本語の単語の意味をまだ知らないという理由で奪われた言葉もまた、貴重な言語的な場を構成する」とあるが、これはどういうことか。その説明としてもっとも適切なものを次の中から選びなさい。

- 1 日本語をまだしゃべれない大岡氏の孫娘でさえ、その名前によって日本語の世界に参加している、ということ
- 2 日本語の間違った使い方の実例は、正しい日本語を生み出すための反省材料を提供してくれる、ということ
- 3 使い方が未熟だったり不完全だったりする言葉もまた、生きた日本語の真実を示す実例である、ということ
- 4 たとえ外国人であつても日本にいるあいだは、日本語の言語空間のなかで活動せざるをえない、ということ
- 5 日本人ですら時には知らない単語に出会ったり、答えに窮したりする事態に直面することはある、ということ

問九 空欄Zに入る語句を次の中から一つ選びなさい。

- 1 退化と素朴化
- 2 純化や理想化
- 3 変容と多様化
- 4 逸脱や畸型化
- 5 流行と世俗化

問十 この文章の筆者の主張としてもっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 日本語に限らず、言語は一般に、それが実際に使われているときにこそ真実の姿を現わす。
- 2 日本語はいわば一つの生命体であって、実際に使う人々が最善の姿へと導いていく。
- 3 現在流行りの日本語論はかつて存在した理想的な日本語の復活を目指すという点で誤った方向に進んでいる。
- 4 誤解や無知によって生じた現象を吸収することで発展を遂げた点で、日本語は世界に類をみない言語である。
- 5 日本語の正しさと美しさは、役人や学者、文学者が決めることではなく、それを使う人が感じるものである。

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

むし暑い、ある六月の日曜日……

私は、人ごみに埋った駅前デパートの屋上で、二人の子供の守をしながら、雨あがりの、腫れぼったくむくんだような街を見下ろしていた。

ちょうど人が立ち去ったばかりの、通風筒と階段のあいだの一人用の隙間をみつけ、すばやく割込んで子供たちを順に抱きあげてやりたりしているうちに、子供たちはすぐ飽きてしまつて、こんどは自分が夢中になっていた。しかし、特別なことではなかったと思う。じつさい、手すりにへばりついてるのは、子供より大人が多い。子供たちはたいていすぐ飽きてしまつて、帰ろうとせがみだすのに、仕事を邪魔されでもしたように叱りつけて、うっとりとまた手すりの腕に顎をのつけるのは大人たちなのである。

むろん、少々、後ろめたいたのしみかもしれない。だからといつて、ことさら、問題にするほどのことだろうか。私はただぼんやりしていただけである。すくなくも、後になって思い出す必要にせまられるようなことは、なにも考えていなかったはずだ。ただ、しめっぽい空気のせいかな、私は妙にいらだたく、子供たちに対して腹をたてていた。

上の子供が、怒ったような声で、「父ちゃん」と叫んだ。私は思わず、その声から逃れるように、ぐっと上半身をのりだしていた。といつても、ほんの気分上のもので、危険なほどだったとは思えない。ところが、ふわりと体が宙に浮き、「父ちゃん」という叫び声を聞きながら、私は墜落しはじめた。

落ちるときそうだったのか、そうなって落ちたのかは、はっきりしないが、気がつく<sup>②</sup>と私は一本の棒になつていた。太からず、細からず、ちょうど手頃な、一メートルほどのまっすぐな棒切れだ。「父ちゃん」と二度目の叫び声<sup>a</sup>がした。下の歩道の雑

脊がさつと動いて割目ができた。私はその割目めがけて、くるくるまわりながら、まっしぐらに落ちていき、乾いた鋭い音をたててはねかえり、並木に当って、歩道と車道のあいだの溝のくぼみにつきささった。

人々は腹をたてて上をにらんだ。屋上の手すりに、血の気の失せた私の子供たちの小さな顔が、行儀よくならんでいた。入口にがんばっていた守衛が、いたずら小僧どもを嚴重に処罰することを約束して、駆上つて行つた。人々は興奮し、こぶしを振上げて威嚇した。それで私自身は、誰からも気づかれずに、しばらくそこにつきささったままでいた。

やっと一人の学生が私に気づいた。その学生は三人連れで、連れの一人は同じ制服の学生、いま一人は彼らの先生らしかった。学生たちは、背丈から、顔つきから、帽子のかぶりかたまで、まるでふた児のように似かよっていた。先生は白い鼻ひげをたくわえ、度の強い眼鏡をかけた、いかにももの静かな長身の紳士だった。

初めの学生が私を引きぬきながら、なにか残念そうな口調でいった。「こんなものでも、当りどころが悪けりや、けっこう死にますね」

「貸して、らん」といって先生は微笑んだ。学生から私を受取り、二三度ふってみて、「思ったよりも軽いね。しかし、欲張ることはない。これでも、君たちには、けっこういい研究材料だ。最初の実習としてはおあつらえむきかもしれない。この棒から、どんなことが分るか、一つみんなで考えてみることにしようじゃないか」

先生が私をついて歩きだし、二人の学生が後につづいた。三人は雑沓をさけて、駅前の広場に出、ベンチをさがしたがどれもふさがつているので、緑地帯の縁にあらんで腰をおろした。先生は私を両手にささげて持ち、眼を細めて光にすかすようにした。すると、私は妙なことに気づいた。同時に学生たちも気づいたとみえて、ほとんど同時に口をきつた。「先生、ひげが……どうやらそのひげは附けひげだったらしい。左端がはがれて、風でふるふるふるえていた。先生は静かにうなずき、指先につけた唾でしめしておさえつけ、何事もなかったように両側の学生をかえりみて言った。

「さあ、この棒から、どんなことが想像できるだろうね。まず分析し、判断し、それから処罰の方法を決めてもらん」  
まず右側の学生が私を受取って、いろいろな角度からながめまわした。「最初に気づくことはこの棒に上下の区別があるということですよ」筒にした手の中に私をすべらせながら、「上の方はかなり手垢がしみこんでいます。下の部分は相なりにすりへっています。これは、この棒が、ただ路端にすてられていたものではなく、なにか一定の目的のために、人に使われていたということの意味だと思います。しかし、この棒は、かなりらんぼうなあつかいを受けていたようだ。一面に傷だらけです。しかも捨てられずに使いつづけられたというのは、おそらくこの棒が、生前、誠実で単純な心をもっていたためではないでしょうか」

「君の言うことは正しい。しかし、幾分、

A

的になりすぎていようだね」と先生が微笑をふくんだ声でいった。

すると、その言葉にこたえようとしたためか、ほとんどきびしいといつてもよい調子で、左側の学生がいった。「ぼくは、この棒は、ぜんぜん無能だったのだろうと思います。だって、あまり単純すぎるじゃありませんか。ただの棒なんて、人間の道具にしちや、下等すぎますよ。棒なら、猿にだって使えるんです」

「でも、逆にいえば」と右側の学生が言い返した。「棒はあらゆる道具の根本だともいえるんじゃないでしょうか。それに、特殊化していないだけに、用途も広いのです。盲を導くこともできれば、犬を馴らすこともでき、テコにして重いものを動かすこともできれば、敵を打つこともできる」

「棒が盲を導くんだったって？ ぼくはそんな意見に賛成することはできません。盲は棒に導かれているわけではなく、棒を利用して、自分で自分を導くのだと思います」

「それが、誠実ということではないでしょうか」

「そうかもしれない。しかし、この棒で先生がぼくを打つこともできれば、ぼくが先生を打つこともできる」

ついに先生が笑い出してしまった。「瓜二つの君たちが言い合っているのを見るのは、実にゆかいだ。しかし、君たちは、同じことを違った表現でいつているのにすぎないのさ。君たちの言っていることを要約すれば、つまりこの男は棒だったということになる。そして、それが、この男に關しての必要にして充分な解答なのだ……すなわち、この棒は、棒であつた」

「でも」と右側の学生が未練がましく、「棒でありえたという、特徴は認めてやらなければならないのではないのでしょうか。ぼくは、標本室で、ずいぶん色んな人間を見ましたけど、棒はまだ一度も見たことがありません。こういう単純な誠実さは、やはり珍しい……」

「いや、われわれの標本室にないからといって、珍しいとはかざるまい」と先生が答えた。「逆に、平凡すぎる場合だつてあるのさ。つまり、あまりありふれているので、とくに取上げて研究する必要をみとめないこともある」

学生たちは、思わず、申し合せたように顔を上げて周囲の雑沓を見まわした。先生が笑つていった。「いや、この人たちが全部、棒になるというわけではない。棒がありふれているというのは、量的な意味よりも、むしろ質的な意味でいつているのだ。数学者たちが、もう、三角形の性質をとかやく言わないのと同じことさ。つまり、そこからはもう新しい発見はなにもありえない」ちよつと間をおいて、「ところで、君たちは、どういう刑を言いつつもりかな？」

「こんな棒にまで、罰を加えなけりやならないんでしょうか」と右側の学生が困つたようにたずねた。

「君はどう思う？」と先生が左側の学生をふりかえる。

「当然罰しなければなりません。死者を罰するということで、ぼくらの存在理由が成立つていっているのです。ぼくらがいる以上、罰しないわけにはいきません」

「さて、それでは、どういう刑罰が適當だろうか？」

二人の学生は、それぞれ、じつと考えこんでしまった。先生は、私をとつて、地面になにかいたらずら書きをしはじめる。抽

象的な意味のない図形だったが、そのうち、手足が生えて、怪物の姿になった。つぎに、その絵を消しはじめた。消しおわつて、立上り、ずっと遠くを見るような表情で、つぶやくようにいった。

「君たちも、もう、充分考えただろう。この答えは、易しすぎてむつかしい。講義のときに習ったおぼえがあるだろうと思うが……<sup>④</sup>裁かないことによつて、裁かれる連中……」

「おぼえています」と学生たちが口をそろえていった。「地上の法廷は、人類の何パーセントかを裁けばいい。しかし、われわれは、不死の人間が現われでもしないかぎりこのすべてを裁かなければならないのです。ところが、人間の数にくらべて、われわれの数はきわめて少い。もし、全部の死人を、同じように裁かなければなくなったりしたら、われわれは過労のために消滅せざるをえないでしょう。さいわい、こうした、裁かぬことによつて裁いたことになる、好都合な連中がいてくれて……」

「この棒などが、その **B** 的な例なのだ」先生は微笑して、私から手をはなした。私は倒れて、ころげだした。先生が靴先でうけとめて、「だからこうして、置きざりにするのが、一番の罰なのさ。誰かがひろつて、生前とまったく同じように、棒としていろいろに使ってくれることだろう」

学生の一人が、ふと思ひ出したように、「この棒は、ぼくらの云うことを聞いて、なにか思ったのでしょうか？」

先生は、いつくしむように学生の顔を見つめ、しかし何もいわずに、二人をうながして歩きはじめた。学生たちは、やはり気がかりらしく、幾度か私のほうを振り向いていたが、間もなく人波にのまれて見えなくなってしまった。誰かが私を踏んづけた。雨にぬれて、やわらかくなった地面の中に、私は半分ほどめりこんだ。

「父ちゃん、父ちゃん、父ちゃん……」という叫び声が聞えた。私の子供たちのようでもあったし、ちがうようでもあった。

<sup>⑤</sup>この雑沓の中の、何千という子供たちの中には、父親の名を叫んで呼ばなければならぬ子供がほかに何人いたって不思議で

はない。

(安部公房『棒』による)

(注) 言……現在では差別的表現とされるが、本文発表時には問題とはされなかった。

問一 傍線 a、b の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

問二 空欄 A、B に入れる語の組み合わせとして正しいものを次の中から一つ選びなさい。

- |   |   |    |   |    |
|---|---|----|---|----|
| 1 | A | 象徴 | B | 典型 |
| 2 | A | 抽象 | B | 普遍 |
| 3 | A | 感傷 | B | 代表 |
| 4 | A | 心理 | B | 一般 |
| 5 | A | 気分 | B | 特徴 |



問三 傍線①「後ろめたいたのしみ」とあるが、なぜ後ろめたいのか。もっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 大人としての役割から逃避しようとするから。
- 2 自分本位で子供を叱りつけてしまったから。
- 3 立ち入ってはいけない場所に進入したから。
- 4 子供を差し置いて自分の方が遊んでいるから。
- 5 考えるべきことをせずにぼんやりしているから。

問四 傍線②「気がつく」と私は一本の棒になっていた」とあるが、「棒になる」とはどういうことか。もっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 平凡な日常から逃れたいと常に思っていた男の願望が具体化したということ
- 2 子供を置き去りにした罪悪感により、男の身体が棒のようにこわばったということ
- 3 日々の生活に疲労困憊し、男の身体から生命力が失われたということ
- 4 自殺しようとした男が、いざ実行に移す手前で直後の姿を想像したということ
- 5 男の人生が締めくくられた時に、その生き様が棒という形で具現化したということ

問五 傍線③「この男は棒だった」とあるが、この「棒」の性質として適切ではないものはどれか。次の中から一つ選びなさい。

- 1 誠実
- 2 特殊
- 3 無能
- 4 平凡
- 5 単純

問六 本文中に登場する先生と学生の役割とは何か。それを示している部分を本文中から八字以上一二字以内で抜き出しなさい。

問七 傍線④「裁かないこと」によって、裁かれる」とあるが、それはなぜか。その説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 法律上はたしてどのような罪に該当するかわからない以上、裁きようがないから。
- 2 軽微な罪なので、いちいち裁いては多忙な現代社会においては効率を損なうから。
- 3 あまりに平凡なあり方そのものが罪であり、それを無視することが最大の刑罰となるから。
- 4 処罰の判断を保留することがこの男に対していつまでも反省をせまることになるから。
- 5 現在の規範では罪とはみなしがたく、この罪に相当する基準ができてから裁くべきだから。

問八 傍線⑤「この雑沓の中の、何千という子供たちの中には、父親の名を叫んで呼ばなければならぬ子供がほかに何人いたって不思議ではない」とあるが、それはどういふことか。その説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 大人が平凡な日常からの脱出をふと夢想するのは特殊なことではない。
- 2 大人の身勝手な行動によって犠牲になるのはいつも子供の方である。
- 3 休日に父親と外出して人ごみの中で迷子になる子供たちはありふれている。
- 4 子供にしてみれば、どんな父親でもたった一人のかけがえのない存在である。
- 5 現代社会にはこの男と同じように凡庸な人生を歩んでいる大人が無数にいる。

問九 安部公房についての説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

1 安部公房は、近代文芸の主流とは一線を画し、「壁」「箱男」などシュルレアリスムの方法で現代社会の不安や不条理を描いた。

2 安部公房は、戦後派の後に登場した「第三の新人」の作家の一人で、現実社会や卑小な人間の姿を私小説的な手法で描いた。

3 安部公房の人間の存在条件を問う作品群は、サルトルやカミュの思想にも通じ、さらに宗教への懐疑についても深く探究している。

4 安部公房は、西欧思想の影響を強く受け、武者小路実篤らと共に、理想主義的に自我の尊厳や個性を重要視する作品を多く発表した。

5 安部公房の人間の実存を追求している作品は、海外でも広く受容され、映像化された『金閣寺』は映画としても高く評価された。

三

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

蝶めづる姫君の住みたまふかたはらに、<sup>a</sup>按察使の大納言の御むすめ、心にくくなべてならぬさまに、親たちかしづきたまふこと限りなし。

この姫君ののたまふこと、「人々の、花、蝶やとめづるこそ、はかなくあやしけれ。人は、まことあり、本地たづねたるこそ、心ばへをかしけれ」とて、よろづの虫の、恐ろしげなるを取り集めて、「これが、成らむさまを見む」とて、さまざまなる籠箱どもに入れさせたまふ。中にも「烏毛虫<sup>かほせし</sup>の、A さましたるこそ心にくけれ」とて、明け暮れば、耳はさみをして、手のうらにそへふせて、まぼりたまふ。

若き人々はおぢ惑ひければ、男の童の、ものおぢせず、いふかひなきを召し寄せて、箱の虫どもを取らせ、名を問ひ聞き、いま新しきには名をつけて、興じたまふ。

「人はすべて、B ところあるはわろし」とて、眉さらに抜きたまはず。齒黒め、「さらにうるさし、きたなし」とて、つけたまはず、いと白らかに笑みつつ、この虫どもを、朝夕べに愛したまふ。人々おぢわびて逃ぐれば、その御方は、いとあやしくなむC ける。かくおづる人をば、「けしからず、ばうぞくなり」とて、いと眉黒にてなむ睨みたまひけるに、いとど心地なむ惑ひける。<sup>①</sup>

親たちは、「いとあやしく、さまことにおはするこそ」と思しけれど、「思し取りたることぞあらむや。あやしきことぞ。思ひて聞こゆることは、深く、さ、いらへたまへば、いとぞかしこきや」と、これをも、いとD と思したり。「さはありとも、音聞きあやしや。人は、みめをかしきことをこそ好むなれ。『むくつけげなる烏毛虫<sup>ア</sup>を興<sup>ブ</sup>ずなる』と、世の人の聞かむもいとあやし」と聞<sup>②</sup>こえたまへば、「苦しからず。よろづのことどもをたづねて、末を見ればこそ、事はゆゑあれ。いとをさなき

ことなり。鳥毛虫イの、蝶とはなるなり」そのさまのなり出づるを、取り出でて見せたまへり。「きぬとて、人々の着るも、蚕のまだ羽つかぬにし出だし、蝶になりぬれば、いともそでにて、あだになりぬるをや」とのたまふに、<sup>③</sup>言い返すべうもあらず、あさまし。<sup>④</sup>

さすがに、親たちにもさし向ひたまはず、「鬼と女とは、人に見えぬぞよき」と察したまへり。母屋の簾を少し巻き上げて、几帳いでたて、しかくさかしく言⑤い出だしたまふなりけり。これを、若き人々聞きて、「いみじくさかしたまへど、いと心地こそ惑へ、この御遊びものは」いかなる人、蝶めづる姫君につかまつらむ」とて、兵衛といふ人、

いかでわれとかむかたなくいてしがな鳥毛虫ながら見るわざはせじ

と言へば、小大輔といふ人、笑ひて、

うらやまし花や蝶やと言ふめれど鳥毛虫くさきよをも見るかな

など言ひて笑へば、「からしや、眉はしも、鳥毛虫ウだちためり」さて、齒ぐきは、皮のむけたるにやあらむ」

とて、左近といふ人、

「冬くれば衣たのもし寒くとも鳥毛虫エ多く見ゆるあたりは

衣など着ずともあらなむかし」

など言ひあへるを、とがとがしき女聞きて、「若人たちは、何事言ひおはさうずるぞ。蝶めでたまふなる人も、もはら、めでたうもおぼえず。けしからずこそおぼゆれ。さてまた、鳥毛虫オならべ、蝶といふ人ありなむやは。ただ、それが蛻ムくるぞかし。そのほどをたづねてしたまふぞかし。それこそ心深けれ。蝶はとらふれば、手にきりつきて、いとむつかしきものぞかし。また、蝶はとらふれば、瘡病ウせさすなり。あなゆゆしとも、ゆゆし」と言ふに、いとど憎さまなりて、言ひあへり。

問一 傍線 a の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

問二 空欄 A ～ D に入る表現の組み合わせとして適当なものを次の中から一つ選びなさい。

- |   |   |      |   |        |   |      |   |      |
|---|---|------|---|--------|---|------|---|------|
| 1 | A | 心ふかき | B | つくろふ   | C | ののしり | D | はづかし |
| 2 | A | 心つよき | B | 恥ぢらふ   | C | 泣き   | D | をかし  |
| 3 | A | 心あさき | B | たばかり   | C | かなしみ | D | たのもし |
| 4 | A | 心ひろき | B | ものめでする | C | 聞き   | D | うつくし |
| 5 | A | 心よわき | B | 隠るる    | C | 案じ   | D | ゆゆし  |

問三 傍線①～⑤の動作主の組み合わせとして適当なものを次の中から一つ選びなさい。

- |   |     |   |      |   |    |
|---|-----|---|------|---|----|
| X | 親たち | Y | 若き人々 | Z | 姫君 |
| 1 | ①   | Y |      | ① | X  |
| 2 | ①   | Z |      | ② | X  |
| 3 | ①   | Z |      | ③ | X  |
| 4 | ①   | X |      | ④ | Z  |
| 5 | ①   | Y |      | ⑤ | X  |
| 1 | ②   | X |      | ② | X  |
| 2 | ②   | Z |      | ③ | X  |
| 3 | ②   | X |      | ④ | Z  |
| 4 | ②   | Z |      | ⑤ | X  |
| 5 | ②   | X |      |   |    |
| 1 | ③   | Z |      | ③ | X  |
| 2 | ③   | Y |      | ④ | Z  |
| 3 | ③   | X |      | ⑤ | X  |
| 4 | ③   | Z |      |   |    |
| 5 | ③   | X |      |   |    |
| 1 | ④   | X |      | ④ | Z  |
| 2 | ④   | Z |      | ⑤ | X  |
| 3 | ④   | Z |      |   |    |
| 4 | ④   | X |      |   |    |
| 5 | ④   | Z |      |   |    |
| 1 | ⑤   | Z |      |   |    |
| 2 | ⑤   | X |      |   |    |
| 3 | ⑤   | Y |      |   |    |
| 4 | ⑤   | X |      |   |    |
| 5 | ⑤   | X |      |   |    |

問四 傍線b「なる」と文法的に同じものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 十三になる年、上らむとて、九月三日門出して、いまたちといふ所にうつる
- 2 男もすなる日記といふものを女もしてみむとてするなり
- 3 世の中はなにかつねなるあすかがわ昨日の淵ぞ今日は瀬になる
- 4 ごほごほとなる神よりも、おどろおどろしく、踏み轟かす唐臼の音も枕上とおぼゆる
- 5 この西なる家はなに人の住むぞ、問ひ聞きたりや

問五 主人公の姫君の言動に対して「親たち」が思っていることとして適當ではないものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 姫君が毛虫を好んでいると世間の人々の耳に入るのはみつともないことだ。
- 2 何か考えがあつての言動なのだろうとは思うが、普通のことではない。
- 3 真剣な様子で理屈を述べ立ててくるのに応対するのは厄介なことだ。
- 4 侍女たちや男の童が、姫君を悪く言うのを耳にするのはつらい。
- 5 世間の姫君とは違っていて、風変わりな様子でいるのは困ったものだ。



問六 波線ア、オの「烏毛虫」という言葉の中で姫君について言及しているものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 ア
- 2 イ
- 3 ウ
- 4 エ
- 5 オ

問七 傍線cの「とがとがしき女」が述べていることとしてもっとも適当なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 蝶が毛虫から脱皮して成虫となるように、姫もきつと今後美しく成長することだろう。
- 2 蝶の羽を掴むと、その鱗粉が手について気持ちが悪いので、蝶よりも毛虫を好む方がよい。
- 3 蝶を好きな姫を誉めている若い人々の考えは間違っていない。む、もっともなことだ。
- 4 蝶へと毛虫が変化する過程を観察し、その理路を追求しようとなさる姫君のお考えは奥深い。
- 5 蝶を捕まえると熱を出すことがあるそうなので、毛虫を好む姫よりも蝶を好む姫の方が恐ろしい。

問八 主人公の姫君の行動の説明として適当ではないものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 自分の納得しない事に関しては、親にも口答えする。
- 2 物事のうわべに惑わされず、その本質を追求しようとする。
- 3 世間の常識よりも、物事の論理的な整合性を重視する。
- 4 姫君としての振る舞いや身だしなみを気にかけない。
- 5 女であっても、積極的に人前に出ていこうとする。

問九 この文章を取めている物語の名前を次の中から一つ選びなさい。

1 『今昔物語集』

2 『榮花物語』

3 『堤中納言物語』

4 『落窪物語』

5 『宇治拾遺物語』







